

デモクラシーの帝国

——ペリクレスの二演説をめぐって——

鈴木 陽 一

目次

はじめに

1. 政治に基づく統治の伝統
2. 紀元前 431 年末の演説
3. 紀元前 430 年の演説
4. 近代デモクラシーへの道

おわりに

「国際関係における「自由主義」や「民主主義」には、そのような法と制度の裏付けはない。そして圧倒的な権力を持つ帝国が、他の諸国との合意によってつくられた法に従う理由もないのである。こうして、デモクラシーという理念が、国内では権力行使を制限しながら、対外的にはむしろ権力に加えられる拘束を解き放ってしまうという逆説が生まれる。」 藤原帰一『デモクラシーの帝国 アメリカ・戦争・現代世界』

はじめに

バラク・オバマによるアメリカ合衆国第四十四代大統領就任演説を聴いて感銘を受けた者は多い。テロとの戦いと深刻な経済危機とに疲弊するアメリカにあって、変化を唱えてきたオバマは、その共和国のデモクラシーの伝統を振り返りつつ、市民に団結を促して次のように述べたのである¹。

宣誓は、時折、暗雲がたれ込め曇り嵐が吹きすさぶ中でも繰り返されてきました。そうした時にあってもアメリカが歩き続けて来れたのは、単に高位高官にある者たちに才覚や先見があったからということではなく、私たち人民 we, the people, が、先達の理想を大事に守り続け、建国の文書に忠実であり続けてきたからです。これまでずっとそうでした。そして今の世代のアメリカ人にとっても、そうでなくてはなりません。…

今日のこの日、私たちがここに集まったのは、恐怖よりも希望を選び、対立と不和よりも目的を一

つにすることを選んだからです。

実に、オバマ政権の誕生——アフリカ系市民の大統領就任——そのこと自体、アメリカが自らの社会の抱える問題を解決すべくその伝統の上に立って本当に変化を遂げてきたこと——すなわちアングロアメリカの伝統に接木して多様性を許容する新しい伝統を作り上げてきたこと——の証左と評しうることも言えよう。往時の公民権運動の高まりを同時代人として共有した者にとっては、自由の季節 liberal hour を経て育ったものの大きさに強い感慨が湧くことを禁じえない事件であったに違いない。確かに、その後、アフターマティブ・アクションの急激な後退など、ときに不当とも思える揺れ戻しがあったのは事実である。しかし、この半世紀の公職への少数者の進出は目覚しく、オバマ就任はいわばその氷山の一角なのであって、アメリカ社会全般の変化は否定し得ないのである²。

他方、より共有されることは少なかったものの、この演説を聴いたとき、古典の素養がある者ならば、いま一つの強い感慨——高鳴る興奮とともに一抹の不安——が湧き起こることを禁じえなかったことのように思われる。危機にあって自国のデモクラシーの伝統を振り返って市民を鼓舞するそのスタイルは、政治に基づく統治 political rule の原点とも言うべきあの古代アテナイのペリクレスの演説を踏襲したものであったからである。そもそも政治なる語はかのポリスに由来するものであり、政治とはそこで行われた如くに言論を持って公共の空間に権力を創り出していく人間の活動のことを指してきた。そして、とりわけツキディデス『戦史』に記されたペリクレスの演説——アテナイのデモクラシーの伝統を確認することで国民に献身を促した演説——は、政治に基づく統治の典型としてのデモクラシーの原像を伝えるものとして後の世界に甚大な影響を

及ぼし続けてきたのである。オバマもまたこの伝統を踏襲して、次の如くに市民にアメリカの再生を図ろうと呼びかけ、さらに邪悪な敵に対してはこれを打ち砕くと宣言をしたのである³。

私たちが野心的すぎるのではないかと懸念する人もいます。大きな計画をいくら立てても、国のシステムには余裕がないのだと。そう言う人たちは、最近のことしか覚えていないのです。この国がこれまでにどれだけのことを実現してきたか忘れてしまっているのです。共通の目的に想像力が結び付き、勇気に必要性が結び付いたとき、自由な人々にどれほどのことができるのか。…

思い出しましょう。昔の人たちは、ファシズムや共産主義と戦うにあたって、ただミサイルや戦車に頼ったのではなく、強固な同盟関係と揺るぎない確信を拠り所にしていたのです。…国の安全は、国の主張の正当性や、手本となる振る舞いから生まれるものだと、謙遜と自制という気質から生まれるものだと、知っていました。この遺産を守っていくのが、私たちです。…

テロを広め、無実の人々を惨殺することで目的を果たそうとする連中には、今、ここで言おう。お前たちよりも我々の精神は強く、決してくじけたりしない。お前たちが我々よりも長続きするなどありえず、我々はお前たちを打ち負かす。

本稿の目的は、かように後世へと大きな影響を及ぼしてきたと考えられるツキディデス『戦史』に記されたペリクレスの演説——とりわけ重要な二つの演説——について、史学の解釈なども踏まえながらその関係を考えることで、演説の解釈——とりわけ現代の政治理論における主流の解釈——を再検討しようとするところにある。実に『戦史』においてペリクレスはペロポネソス戦争開戦一年目と二年目との二度に渡って重要な演説を行っており、それらいずれもが現代思想に甚大な影響を及ぼしてきた。前者は政治に基づく統治の思想を描いた古典として尊重され、とりわけ二十世紀後半以降、功利主義への反省を経て政治的なものの概念の中心に再び公共性が置かれる過程にあってはその有力な拠りどころとされてきた⁴。また他方、後者は、第二次大戦後、国際関係思想における安全保障のジレンマを明確化

したものとして重視されるようになり、これを記したツキディデスはリアリズムの開祖と位置付けられるようになった⁵。ただ、しかしながら、かように演説の一部を引いて解釈を施し、それに基づいて政治思想や国際関係思想を語るのは、誤りとは言わずも、不正確なところがあると言えよう。両者はともにツキディデスによってある全体の文脈に置くことで描かれたものであったからである。すなわち、アテナイ人にしてその将軍であったツキディデスは、ペロポネソス戦争におけるアテナイの敗北という現実にあって、過去における自国の栄光の姿というよりは、現在における自国の敗北というその命運の起源を求めてこの史書を記した、と考えるのが自然であり、そうとすれば両演説ともかような文脈に置いてその言わんとするところを解するのが妥当なのである。

1. 政治に基づく統治の伝統

政治的なものの概念の中核に公共性を置く主流の政治理論——とりわけアーレントらの政治理論——の背景には、人間はその世界に意味付けを行い、その理解に基づいて実存的に生きている、と考える存在論的な思考がある。人間にとって周囲に広がる世界は本来的に自然法則によって記述される対象として存在しているわけではない。人間が世界のあり方について確実に言えることは、その志向的構成によって眼前のものごとを知覚し、これに意味を見出している、ということである。こうした経験の積み重ねから、唯一の世界の存在を確信し、さらに他者の存在を確信——間主観性を共有——しつつも、人間はそれぞれが異なった視座から世界に意味付けを行い、あくまで実存的に生きている⁶。その意味で、人間がかかわる現象は、自然法則によって理解することが不適切——おそらくは不可能——な意味世界の沈殿物なのであり、人間とは自らを決すべく世界に働きかけ、互いに体をぶつけ合って競争をする、そうした可能性をもった存在なのである。

そうしたなか、古来、人間はある程度までに合意を形成してその世界を分割し、それぞれに財産権を設定するなどして私的な領域を形成し、互いが衝突することを制御してきた。私的な財については財産権の範囲内で各自の選好に基づいて処分することが

できるし、さらに、貨幣のような「共通の尺度や公分母」を用いてその価値を表示し、同様の意味づけをする人とのあいだで互酬性の原則に基づいてそれらを交換することもできる。こうして、各自は、その私的な領域の範囲内ではあるが、他から干渉されることない自由を享受し、さらに互いに協力していくための生活基盤を築いてきたのである⁷。

ただ、もちろん、ここで留意すべきは、人間はかような棲み分けのみに頼る生き方をしてきたわけではない、ということである。人間の暮らす実存的世界のなかに自然科学のような厳密さをもって私的領域を設定することはできないし、そもそも、世界がそのように各自の処分に委ねられた私的領域だけから成り立つことはあり得ない⁸。その意味で、複数の人間が暮らしていくには、私的領域の範囲についての調整が必要であるし、また、そのあいだには人々の視線が交錯し、私的な領域を支えることになる公的な領域——共通の領域——が存在することになる。アーレントは、おそらくはこうした理解に基づいて、私的領域と対比しつつ公的領域が複数の視座から構成されることについて次のように述べている⁹。

公的領域のリアリティは、これとはまったく異なっていて、無数の視座と側面が同時に存在することに依拠している。なぜなら、このような無数の視座と側面のなかにこそ、共通世界がおのずとその姿を現わすからである。しかも、このような無数の視座と側面に対しては共通の尺度や公分母を決して考案することはできない。なぜなら、なるほど共通世界は万人の共通の集会場ではあるが、そこに集まる人々は、そのなかで、それぞれ異なった場所を占めているからである。そして二つの物体が同じ場所を占めることができないように、ひとりの人の場所が他の人の場所と一致することはない。他人によって、見られ、聞かれるということが重要であるというのは、すべての人が、みなこのようにそれぞれに異なった立場から見聞きしているからである。これが公的生活の意味である。

公的領域に出される意見、それらは何れも憶見——ギリシア語の「こう見える」に由来するもの——に

すぎないが、人間はその構想力 *imagination* をもってリアリティを構成することができるのである¹⁰。また、さらに、その公的領域が私的領域を滋養して保護してきたことについて、次のように述べている¹¹。

「公的」という語は、世界そのものを意味している。なぜなら、世界とは私たちすべての者に共通するものであり、私たちが私的に所有している場所とは異なるからである。…ここでいう世界は、人間の工作物や人間の手がつくった製作物に結びついており、さらに、この人工的な世界に暮らしている人々のあいだで進行することから結びついている。世界のなかに共生するというのは、本質的には、ちょうど、テーブルがその周りに座っている人々の真ん中に位置しているように、事物の世界がそれを共有している人々の真ん中にあるということの意味する。つまり、世界は、すべての介入者と同じように、人々を結びつけると同時に人々を分離させている。

共通世界としての公的領域は、人々を一所に集めるけれども、同時に、言わば体をぶつけ合って競争するのを阻止することが期待されている、そうした場なのである。

主流の政治理論に従えば、政治に基づく統治という現象が登場し、近代以降その存在感を増してきたのは、まさにそうしたことを背景としてのことになる。公的領域においては、ア・プリオリ *a priori* に一つの見方が優位するというはその定義からしてあり得ない。また、一つの見方を無理強いするのではその課題とされる機能を果たし得ない。それゆえ、公的領域に公正で実効的な支配をもたらすため、公のことがらについては一定の俎上に載せて意見を出し合い、合意を調達することとして、この領域を支配する権力を創出することが必要とされるようになってきたのである。アーレントの指摘に従えば、西欧においては古来、権力の理解には二つの違う伝統があったことを確認することができる。一つは今なお広く流布している理解で権力を命令—服従の関係に依拠すると考えるものであり、いま一つはこれに劣らぬ由緒があるものの近代以降再発見された理解で権力を多数者の同意に依拠するものと考え

るものである。これらのうち、政治に基づく統治の伝統は、明らかに後者に属する¹²。かような伝統は、人々が他人の財産の如く扱われていた時代が過ぎて自らの私的領域を充実させ、それに伴って人の行き来も増大して生産力も向上すると、より重んじられることとなった。私的領域が拡大するにあって、それを支えるのに十分な公的領域を維持する適正な権力が必要となったからである。

すなわち、アーレントからコノリーへと繋がる現代政治理論の流れに従えば、政治とは公のことがらについて異議を申し立て和解を形成する人間の活動であるし、多数者による支配を意味するデモクラシーはその典型的なあり方と解されることになる。そして、その意味において、政治という現象の中核には公共性があるし、その目的は公的領域における自由そのものにあるということになる。また、歴史的に見てこの政治に基づく統治の伝統の起源は古代ギリシアに遡るであろう、というのが長く政治学のとってきた前提であったが、このような考えに従えば、それは十分な理由のあることとなる。交易が活発化して繁栄を迎え、様々な人々が行き交って共通の領域が拡大することとなった古代ギリシアにあって、初めてかような統治が試みられた、と評しうるからである。そして、そのあり方を示したペリクレスの演説は、その後もその精神を伝えるものとしてよくひかれることになったのである。

2. 紀元前 431 年末の演説

政治に基づく統治の典型としてのデモクラシーの原像を今に伝えるとされるペリクレスの葬送演説——デモクラシーの精神を謳歌し、アテナイ人の士気を鼓舞した演説——の背景には、もちろん、東地中海世界においてポリスと呼ばれる市民の力を基礎とした都市国家が興隆し、互いにその覇を競い合っていたという事実がある。もとより、ギリシアとその多島海は東西交流の要衝の地にあって、BC16世紀以降にはクレタ島を中心にミケーネ文明を発展させた地にある。その後、これは異民族の流にあって荒廃を見たものの、BC8世紀にはポリスと呼ばれる都市国家の興隆を見て、再び躍動のときを迎えた。当時、東地中海においては、商業が活性化して人々は空前の繁栄のときを迎え、さらに周辺からは

多様な背景を負った人々が流れ込み、新たな思想・文化が形成されつつあったのである。

重要なことは、これらポリスの多くにおいては、市民が民会などにおいてそのゆくえを決するというそれまでの世界にない独自の統治形態——彼らがポリスの統治、すなわち政治に基づく統治というもの——の発展が見られていた、ということであった。実に、当時、市民は兵士としてそれぞれのポリスの命運に係わる存在となっていた。陸戦においては、彼ら市民が甲冑をつけて歩兵として横長の隊列を組み、槍を持ちながら敵軍に肉薄する戦法が採られていたのである。それゆえ、危険を担って自らをポリスに捧げた市民たちは国の統治においても決定権を求め、アテナイ、スパルタなどの多くの都市国家において、市民が集う民会を最高意思決定機関とする統治形態が成立したのであった¹³。また、さらに重要なことは、その意味で、各々のポリスはその自由な市民による自治のゆえに極めて自立性が強く、ときに協力して外敵に対抗するものの、ときには反目して相争っていた、ということであった。実際、BC5世紀、ペルシア帝国がこれへの進攻を試みると、ほとんどのポリスはこれに対抗して団結して闘い、ギリシア人たちはその士気の高さから敵の大軍を下して、その繁栄は絶頂のときを迎えた¹⁴。さらにその勝利は結果として、ペルシア戦争を主導したアテナイ率いるデロス同盟諸都市とその強大化に懸念を抱いたスパルタ率いるペロポネソス同盟諸都市との全ギリシアを舞台とする深刻な対立を生むこととなったのであった。

そうしたなか、BC435年、その辺境の都市国家エピダノモスにおける平民派と寡頭派とのあいだの内紛が周辺に波及するようになると、それまで微妙な関係を保ってきたポリス世界の均衡は音をたてて崩れ出すこととなった。内紛にあって平民派はペロポネソス同盟の有力都市国家コリントに救援を求めたが、エピダノモスの母都市であったキュリュキラはその介入に激怒し、自らの艦隊を派遣してコリント艦隊を打ち負かした¹⁵。ここで、コリントの反撃に恐怖したキュリュキラはデロス同盟の盟主アテナイに救援を求め、アテナイは民会での大激論の末にキュリュキラ支援を決めたのである。もちろん、こうした動きに対しては、ペロポネソス同盟の盟主スパルタが、アテナイに対して、このまま行けば自ら

も乗り出さざるを得ない旨の警告を発するなど、戦争回避への試みがなされないわけではなかったが、対立は深刻で賽はすでに投げられた状態にあった。結局、ペリクレス率いるアテナイはスパルタの最後通牒を拒絶して開戦を決定し、BC431年、古代ギリシアは自らを滅ぼす巨大な戦争へと突入していったのである¹⁶。

後世の政治思想に甚大な影響を及ぼしたペリクレスによる葬送演説は、そうしたなか、緒戦におけるアテナイ市民犠牲者を悼みつつ、続く戦争への市民の士気の高揚をねらって行われたものであった。開戦の年、アテナイはペロポネソス同盟軍のアッティカへの侵攻を許したものの、当初の計画通りに城壁内への籠城を敢行し、その海軍力を効果的に活用することで、全体の戦いを有利に進めて年の瀬を迎えた。ここで開戦を主導してきた指導者ペリクレスは、次のごとくに自らのポリスのために命を捧げた者たちを弔いつつ、ギリシアのなかでも最も自由な政体であるアテナイのデモクラシーの伝統を確認する演説を行ったのである¹⁷。

さて私はまず祖先のことから語り始めよう。このような機会に言及される名誉が彼らに与えられて当然であり、適切でもあるからである。というのは、この国土には同一の人間が子々孫々の継承によって住み続けており、吾々の祖先はその国土を今日に至るまで、その武勇によって自由なものとして伝えてくれたのである。…

吾々が享受している政体は、隣国の法律を模倣するようなものではなく、むしろ吾々自身が他の人々の模範になっているのである。そして少数者ではなく、多数者によって治められているがゆえに名称においてはデモクラシーと呼ばれている。しかしながら、法律上では私的係争の面で全員に平等の権利が与えられているものの、評価に際しては各人が何事かに名声を博するに応じて優先的に公的栄誉を与えられるのであって、能力よりも階級によって評価されるのではない。また貧困のゆえに世に埋もれて、ポリスのために有益なことを為す能力がありながら、それを妨げられるということもない。しかも吾々は公的な政治活動の面で自由に行動しているが、日常私生活における相互間の猜疑心の面でも同様であって、隣人が気ま

まに振舞ったからとて立腹せず、また不機嫌な顔を見せて、実害はないにしても、見た眼に不快感を与えるようなことはしない。しかしながら、このように吾々は私的交際においては傷つけ合わないように生活しているけれども、公的生活では畏怖の念に基づき、誰よりも法律には違反しない。そして、その時々当局には聴従し、また法律、とりわけ被害者を救済するための法律や、書かれてはいなくても違反者には公認の恥辱をもたらす不文法にこそ吾々は従うのである。

そして、さらにその上で、自らの強さの源泉がその政体にあることをも主張し、次の如く市民を鼓舞したのであった¹⁸。

吾々は更に軍事訓練の面でも次の点で敵方とは異なっている。吾々はポリスを万人共通のものとして公開しており、いかなる時にも外国人排斥によって何人かが知ったり見たりするのを妨げはしない。何事も隠されていないので、敵の何者かが見れば、有利になるであろうが、吾々は装備や策略よりも、自分自身から湧き出る勇気の方を信頼するのである。…

吾々は質素と共に美を愛する。そして智を愛するけれども、柔弱にはならない。富は自慢のためよりも、むしろ行動のための機会として利用する。貧困を認めることは恥ではないが、むしろ努力して脱却しないことこそ恥辱なのである。そして同一の人間のうちに家事と国事との両方に対する配慮が備わっており、また各人は別々の仕事に従事していても、国家（ポリス）のことを十分に判断することができる。というのも、吾々のみが国事に関与しない人間を閑雅な人ではなく無益な人と見なし、そして吾々自身が国事について判断を下すか、または正しく熟慮するかであって、吾々は議論を行動への障害と見なさず、むしろ為すべきことの実行へ進む前に、あらかじめ言論によって教えられていないことこそ障害だと見なすのである。…

吾々は全陸海をして吾々の武勇に接せしめ、到る所に禍福両方の永遠の記念碑を建てたのである。そして、かくの如きポリスが奪われるのを防ぐためにこそ、この人々は高貴に死んでいったのであ

るから、残された人々も全員が進んでポリスのために苦勞を担うべきであろう。

繰り返しとなるが、ここに示されたアテナイのデモクラシーの理想像の記述はその後の西欧世界に決定的な影響を残すことになった。オクシデントは、オリエントとは異なり、自由な市民に支えられているから、軍事的に強いしまた文明的に優れている。歴史の父とされるヘロドトスはその『歴史』において、これに先立つ対ペルシア戦争の勝利の原因をポリスのかように自由な市民の力に求めたが、ツキディデスの記述はさらにそのオクシデントの主流にアテナイのデモクラシーを置くこととなった。こうして、オクシデントとはかような流れ上に立つものであり、さらに人間はポリスに参加してこそ最も人間らしく存在する、との言説がその後の世界に受け継がれることになっていったのである。もちろん、確かに、当時、ポリスを多元的なものとみなし、デモクラシーを良きものとする考えはギリシアに広く流布していたし、ときのアテナイにおいては特に顕著な思潮となっていた¹⁹。その意味でアテナイの政体を褒め称えたツキディデスの記述がまったくの創作物であったり、特に独創的であったというわけではない。ただ、ポリスに関する記述においてこれほど影響を残した文章は他には存在しない、という事実はいくら強調しても強調しきれものではない。プラトンもおそらくはこの記述を意識して彼なりの理想の政体を語っているし、アリストテレスにあっては、そのことはより鮮明であった²⁰。さらに、すでに述べたように、かような言説は 20 世紀後半におけるアーレントらによる公共空間の再生の議論においても重要な論拠とされることにもなった。その意味でこれは決定的な記述であったと言えるのである。

しかし、実のところ、ここでペリクレスをして語らしめたデモクラシーへの手放しの賛辞がツキディデスの真意であったのかといえ、そうではなかったであろう、というのがその素直な読み方になる。誤解を受けることの多い彼の主張の本旨は、ここから今少し読み進めれば、容易に明らかとなるのである。

3. 紀元前 430 年の演説

ツキディデスを読み進め、さらに現代の歴史家の研究なども顧みて明らかになることは、ペロポネソス戦争においてアテナイが没落していく背景には、実のところ、デモクラシーを掲げていたアテナイが東地中海に帝国を建設し、そのことについてギリシア世界の全体に広がる非常に強い反発があった、ということである。先に述べたように、ペルシア戦争の後も多く多くのギリシア都市国家がペルシア帝国の逆襲に備えてアテナイの主導したデロス同盟に参加し続けていたが、ペリクレス率いるアテナイはこれを徐々に自分の都合のよいように改編し、ほかのポリスをその影響下に置くよう仕向けていたのであった。もともと同盟加盟都市は艦船・兵員などを出すかそれに代わる貢納を支払うこととなっていたが、実質的には兵力を拠出するのはアテナイのみであった。それゆえ、同盟はアテナイの海軍力を育てるように設計されたものとさえ言えたが、アテナイ人の貪欲さはそれに留まるものではなかった。当初デロス島あった同盟金庫は後になってアテナイへと移され、アテナイは同盟の資金を自国のために流用し出し、さらに同盟加盟都市の鑄造権、裁判権をも制限し出した。アテナイ人は後の歴史家が「アテナイ帝国」と呼ぶものをつくり出していたのであり、結局のところ、誇り高いデモクラシーは収奪された富の上に成り立つものであったのである²¹。もちろん、かようなアテナイの増長については、それまでポリスの自由を謳歌していたほかの都市国家が穏やかでいられるはずはなかった。戦争勃発当時、アテナイの横暴はきわめて不評で、多くのギリシア人たちはギリシアを自由にすると宣言したスパルタにきわめて好意的であった。ツキディデスの『戦史』にも、言論でも行動でも力の限りスパルタ側に味方しようと懸命であった、と記されている²²。

またさらに注意を要すべきは、実のところ、国内統治の観点から見てもアテナイのデモクラシーは先のペリクレスの演説にあったような多数者による支配と言えるようなものではなく、それゆえの脆弱性を秘めたものであった、ということである。実に、アテナイの力の源泉は少数者である市民による多数者であるその他の者への過酷な支配にあったのであ

る。BC 5 世紀初頭、直轄領ラウリウム銀山から採れる銀は莫大な収益をもたらし、これらは三段櫂船艦隊の建造に充てられてその海軍力を支えることになった。また、BC446 年、エウボイア島に反乱の動きがあると、ペリクレスはこれに軍隊を派遣してその住民を退去させ、ここに巨大な農園を開設して島を後背地の乏しいアテナイの食糧基地とした。これら鉱山、農園には多数の奴隷たちが働いていたが、アテナイ市民たちは自らの利益を守るため、これらの地に赴いて直接に監視を続けていたのであった²³。

このような一連の現実、当然にアテナイにおいてもその支配体制のあり方への疑念を広め、国論を裂くことへ繋がるものであった。確かに、このような他国の内政への介入、少数者である市民による多数者であるその他の者たちへの過酷な支配は、決してアテナイに限ったことではなかった。敵のスパルタは軍事強国として恐れられる存在であったし、その力の源泉は人口の 9 割を占める奴隷たちの労働にあり、市民たちはその監視に余念がなかった。しかし、デモクラシーを掲げた者たちによる過酷な支配の現実、そのあり方の是非そのものに疑問を投げかけるものでもあった。アテナイ人は言葉の上では善人の如く振舞いながらも、実際には暴君の如く振舞う。かようにあからさまな偽善は許されるものなのだろうか。開戦 2 年目の BC430 年、エジプトに発生した疫病がペルシアを經由して街に籠城していたアテナイ市民たちを襲い、死者が街中にあふれると、戦いを続けることへの疑念はもはや抑えつけることができなくなった。ここにおいて、デモクラシーの帝国の拡張を推進してきたペリクレスはついに糾弾されるに至ったのである²⁴。

BC430 年の演説——国際関係論におけるリアリズムの一端を示したとしてよく引き合いに出される演説——はこうしたなかなかされたものであった。市民たちが無謀な戦争に引きずり込まれたとしてペリクレスの罪を訴えたのに対して、ペリクレスは市民の側に変節があると抗弁して次のように述べたのであった²⁵。

私に対して諸君の激怒が起こったのは私の予想どおりであり、その原因も私は承知している。そのために私は民会を招集したのだが、それは諸君に

思い出して頂くためであり、また諸君が私に対して立腹したり、苦境に対して屈服したりするのが不当である場合には、それに抗議するためでもある。…

もしも他の面で幸運な状態にあり、戦争か平和かを選択できるのだとすれば、戦争は大いなる愚行である。しかし譲歩して隣国に直ちに屈服するか、それとも危険を冒して生存を守るか、この二者択一を迫られていたのだとすれば、非難に値するのは、むしろ危険を回避する人であって、それに抵抗する人の方ではない。そして私自身は以前と同様の意見を堅持し、それから離れはしない。ところが、諸君の方は変節しようとしているのだ。

そしてさらに、その上で、すでにアテナイは巨大な帝国を手にしており、それを失うことがいかに危険であるかを訴え、戦争を継続することを主張したのであった²⁶。

このポリスが帝国支配から得ている栄光は、諸君すべてが誇りにしているのだから、これを諸君は擁護すべきであり、その苦勞を回避してはならない。さもなければ、その栄光を追い求めるべきではない。更には、自由の代わりに隷属かという、唯一点をめぐって戦っているのではなく、支配権の喪失や、諸君が支配中に受けた憎悪に由来する危険とも関係しているのだと考えなければならない。また何人かが目下の状況に恐れを為して消極主義によって善人ぶるとしても、権力から身を引くことは、もはや諸君には許されないことである。…

諸君、銘記せよ。このポリスが全人類の中で最大の名声を博しているのは、災難に屈せず、戦争では最大の苦勞を費やしたがゆえであることを。そして吾々が今この時に盛者必衰の理によって敗れることがあったとしても、この偉大な国力の記憶は永久に後世に伝えられているであろう。すなわち、吾々がギリシア人として最も多くのギリシア人を支配し、最大規模の戦争において敵の全連合軍に対しても各国軍に対しても抵抗しえたこと、そして吾々があらゆる面で最も豊かで大きなポリスに住んだことが。

ツキディデスがここで明らかにしようとしたことは、安全保障のジレンマと呼ばれる対等な国家が並存することで起るそのあいだの困難な状況もさることながら、基本的にはデモクラシーの政体に内在する不安定性であった、と素直に考えるのが本稿の解釈である²⁷。確かに、前述のごとく、公的領域において自由に振舞い、共通の事柄に献身するポリスの政体はまことに人間らしい生き方を提供する場であり——有名なアリストテレスの言い方を用いれば人間はポリスのなかであってこそ人間らしい動物なのである——、また、武装した市民の高い士気に支えられたその軍隊は数十倍の兵力を擁するペルシア帝国軍を打ち負かしました。しかし、致しかたないとは言え、かように市民の力に頼るデモクラシーは慢性的な内部抗争を抱えた不安定な統治となる。多数者の支配は往々にして少数者の犠牲の上に成り立ち、内部の矛盾のしわ寄せを外に求めて不正とも思える帝国を生むことさえある。しかも、市民たちは移り気での確かな判断ができないかもしれないし、利己心に走って墮落するかもしれない。結局、疫病はペリクレスをも襲って彼は急死することになるが、ツキディデスの記述はその後もデモクラシーへの問責を続けていく。良き指導者を失ったアテナイは市民たちの墮落によって凋落していった。BC415年には扇動政治家に煽られた市民たちがシチリア遠征を執行するものの敵軍に壊滅的な大敗を喫し、その後、ペルシア帝国がスパルタ支援に出ると、デロス同盟を離脱する都市が続出した。BC404年、アテナイはついに全面降伏の己む無きに至ったのである²⁸。

政治に基づく統治——そして、その典型としてのデモクラシー——は公的領域に本当に公正な支配をもたらすことができるのだろうか。実にこのような疑念はツキディデスのみが抱いていたというわけではない。ある意味で、当時、心ある者のあいだではデモクラシーへの疑念が共有されていた、とさえ言える。知られているように、プラトンは反デモクラシーの思想家であり、その著作において師ソクラテスを登場させて幾度となくデモクラシーへの批判を語らしめた²⁹。政治に基づく統治を懐古趣味の如くに再発見して、これを「法の支配」という彼の理想の統治形態にかなうものとして正当化した——主知

主義的に正当化した——のは、アテナイの無残な没落よりはるか数十年ののち、ポリスの世界を影響下に置く超大国マケドニアからアテナイへと出たアリストテレスによってなされたことにほかならない。しかも、その理想とした政体はおそらくは数万人規模の都市国家のことであって、かように巨大なアテナイ帝国を支持したわけではなかった³⁰。

4. 近代デモクラシーへの道

西欧社会において、18世紀以降、政治に基づく統治が復興を遂げていく過程を再考するとき、復興の背後にあった当時の状況——近代化によって人々の生活空間が拡大し、これに伴って国家権力が変容の過程にあったという状況——にはよくよく留意すべきである。長く続いた農業社会を基盤とした中世的秩序においては、人の行き来は限られ、生産力も限られており、人間のなせることは決して大きなものではなかった。ところが、新世界が発見され、さらに資本主義が興隆すると事態は大きく変わることとなった。人間は未曾有の可能性を手にしたものの、広大な空間にその私的領域をさらし、その前には共通の課題が置かれることになったのである。こうした生活空間の拡大は、人々の私的領域を滋養し保護するとともにこれを共通の関心で結びつける、強力な公的領域を必要とするものであった。こうして、公的領域を統治する近代国家の権力は人間の生活の隅々にまで及ぶことが期待され、実際にも、そうした力が創出されて、それは絶大なものとなったのである。ただもちろん、こうした強力な国家権力の登場はその行使にそれまでにない危険を抱えるものでもあった。本来、合理的かつ同意があってこそ効果的に行使される権力が、それを欠いたまま剥き出しの暴力となってそれまでにない専制を生む可能性があったのである。興隆しつつあった資本主義社会における財産権を侵害してその発展を妨げる可能性があったし、そもそも強力となった国家権力の行使が本当に公的利益に資するように確保できるのか深刻な疑念があったのである。

そうしたなか、西欧においては、拡大しつつあった私的領域を守るべく、アリストテレスを経て長く伝えられてきた「法の支配」の思想が再定義され、これは社会契約論という新たな統治思想として受容

されることになった。国家権力は人民の私的領域を守るためにこそあるもので、それは人民の契約によって創設されたものなのだ、と国家の存在が理由付けられたのである。とりわけロックらによって財産権が神聖なものであることが理論化され、資本主義の興隆に伴って新たに創出された様々な類の生産財、消費財は保護されることになった。国家が私的領域に立ち入ることは厳しく制限されるべきであるとの考えは、その後の資本主義社会の発展を支え、各国で発達した私的領域の自由を守る政体を基礎づけた。現在のリパタリアン最小国家論へと繋がっていく。

ただ、ここで留意すべきは、当初、私的領域を保護し滋養する公的領域の統治のあり方については、政治に基づく統治を構想する者たちは少数派と言える存在にあった、ということである³¹。ツキディデスの描くアテナイの例に見たように、政治に基づく統治は不安定をもたらすもので、適切な統治をもたらさないように考えられたのである。実際、新大陸の発見以降、王権はその力を強め、伝統的な都市国家は歴史の舞台からその姿を消そうとしていた。各地の王権は広大な領域を統治し、強大な軍備・命令システムを整えて共和制を敷く都市国家を次々に駆逐し出していたのである³²。

マキャヴェリらを源流とする近代共和主義思想が政治に基づく統治を強力な近代国家にも応用できると主張して、その筋道をつけようとしたのはそうしたなかのことであった。強力な国家をつくるにはやはり共和制——この場合、純粋なデモクラシーではなく、民主制、貴族制、君主制の三つの政体が共存し、互いに牽制しあう政体——こそが望ましい。一部の者の利益に反することであったとしても、多数者の意思に基づく強力な権力によって公益を追求することが可能になるからである。マキャヴェリは、政体のモデルをアテナイではなく、より強力な軍事力で容赦なく帝国の建設に邁進した共和制ローマに求めつつ、次のように述べたのである³³。

都市国家が領土でもその経済力でも大をなしていくのは、かならずといってよいほどそれ家が自由な政体のもとで運営されているばあいにかぎられている…
事実、ペイストラトスの僭主政治の束縛を打破

したアテナイが、その後のわずか百年のうちに全盛期を迎えたというのも、まことに驚嘆すべきことである。けれども、それにもまして、その国王の絆から脱したローマが、あの大帝国へと成長をとげていったことについては、讃嘆のあまり言うべきことばを知らないほどである。

その理由はいとも簡単に理解できる。つまり私的な利益を追求するのではなくて、共通の利益に貢献することこそ国家に発展をもたらすものだからである。しかも、このような共通の利益が追求されるのは、共和国をさしおいては、どこにもありえないことはたしかである。つまり、共和国にとって利益になることなら、なんでも実行されるからである。したがって、なにがしかひと握りの個人が、その政策遂行で迷惑をこうむるようなことがあっても、それによって利益を受ける人々が多ければ、損害を受ける少数の人々の反対を押しきっても、これを実行に移すことができるのである。

また、その前提として、共和国は国内の対立に起因する不安定性——マキャヴェリが読んだかどうかは論争のあるところであるが、ツキディデスが懸念を示した国内の不安定性——を抱えるものであるが、得られる強力な軍事力を考慮すれば、そのことは不安定な国際関係にあっては致し方ない代償であったとして、次のように述べたのである³⁴。

ローマは平民には武力を与え、外人には移住を認めて人口増をもたらした。そこで騒動が起こるきっかけは、際限のないものとなっていたのである。しかし、ローマの国内がもっと平和であったとしたら、逆にローマがより弱体化するという結果をもたらし、あの偉大さにいたる道を遮断することになっていたであろう。ローマが内紛のもととなるものを捨てさろうとすれば、同時に大国になっていく伸長力をもなくしてしまうことになったのである。…

国を建設するにはローマの組織に範を求めべきで、その他の国家の例はならうに値しないと私は信ずる。…人民と元老院とのあいだにもちあがる対立関係も、ローマのような偉大な国家へと成長するためには、どうしても避けることのできな

い必要悪として忍ばなければならないものだと
思うからである。

ここでは、共和主義を主張するのに、多数者の意思に基づいて強力な権力を創出することの優位性が強調され、アリストテレス以来それまでの主流であった主知主義的な正当化——そして、その背後にある「法の支配」による正当化——は採られていない。その意味で、マキャヴェリは近代政治学の開祖と評される³⁵。

フィレンツェの政治思想はイングランド清教徒革命への移植を経て、ジェファーソンら合衆国建国の父らの思想へとつながる環大西洋の近代共和主義の伝統を築いた、とするのはポーコックらの主張である³⁶。こうして、政治に基づく統治の思想、それに人間は政治的であるときに最も人間らしく存在するとの市民的人文主義の思想は再び力を得ることになり、欧州人の生活世界の拡大に伴って世界に波及した、と解されるのである。

おわりに

オバマ演説が意識あるいは無意識のうちにペリクレスを模倣していることは間違いない。商業メディアが世の煽情をあおる時代、ナショナル・モールに連なる大勢の人々に言論をもって変革を訴える姿は古典期のデモクラシー指導者像を想起させもした。実際、アテナイの戦争からわずか2400年余りしか経っていないのだ。確かに、ポリスの統治が広大な空間において可能となったのはマキャヴェリを始め合衆国建国の父へと繋がる近代政治思想の流れの功績に違いない。ただ、今や世界に遍く広がる政治に基づく統治の伝統は、人類史上きわめて短い時期、しかも今にしてみればある小さな都市の記憶——今では図書館の片隅に置かれ、あまり省みられることのない記憶——に依存しているということは紛れもない事実なのである。人々はそれを模倣し、改良し、繰り返すことで現在の政治に基づく統治を創出した。それは奇跡的とも言えることであり、その記憶の重要性はいくら強調してもしきれものではない。

ただ、本稿で明らかにしたように、その演説を書き遺したツキディデスがペリクレスらをして語らし

めようとしたのは、後世の政治理論家たちが解するような政治に基づく統治への手放しの贅辞などではない。彼がそこで示そうとしたのは、公的領域において自由に振舞い、共通の事柄に献身するアテナイの政体は人間らしい生き方を提供する場——後のアリストテレスの言い方を用いれば——ではあるが、それはきわめて不安定な場でもある、との見方であった。その言説とは裏腹に、デモクラシーは維持するため無数の人々の犠牲の上に立ち、また際限ない不和、内紛から不安定性を抱える。犠牲は堪え難いほどであるし、ポリスは良き指導者を失えば容易に没落する命運にあったのである。アーレントらは古代ギリシアにおける市民に支えられた政体を称えるが、そうした主流の政治理論はツキディデスの本旨を無視して本来は警告であった言説の一部を心地よく解釈し直し、結果として虚像を追い求める錯誤を犯しているとも言えるだろう。

もちろん、ツキディデス『戦史』についてはアテナイのデモクラシー——そしてそれを率いたペリクレス——の物語を悲劇として称えているとの解釈も成り立ちうるし、それはまったくに正鵠を射た理解のように私には思われる。真理を求めるなどという後のソクラテスのごとき墮落に陥らず、避けることのできない悲劇——あるいは避けてはならない悲劇——に立ち向かうことこそをよしとした、との実存哲学的な解釈が成り立つのである。ただ、そのような理解は、デモクラシーという政体は不安定性というきわめて深刻な代償を伴うものである、との見方を是認したものであって、現代人のデモクラシー理解からは随分と離れた理解となる。そして、そうすれば、望ましいのはかような潔い生き方であってデモクラシーそのものではないということにもなる³⁷。

また、さらに留意すべきことは、ツキディデスは当時の国際関係に存在した安全保障のジレンマの状況を描きつつも、そのなかにおいてデモクラシーについては基本的に好戦的で戦争に強い政体として描いていた、ということである。現代の国際関係論においては、共和国間では戦争は起きづらく、そうであるから各国とも共和制をとることが望ましい、とするカントの有名な命題が長らく尊重されてきた。戦争になって困るのは被害を直接に受ける人民であるから戦争が起きそうになっても人民はこれを抑え

に回るであろう、との考えである³⁸。ところが、ツキディデスの物語はデモクラシーについて——これと矛盾するというわけではないし、そのことは決定的に重要なのであるが——かような思想とは異なる点を強調した。ペルシア戦争勝利以来の思潮を受けながら、デモクラシーは自由な人民の力に頼ることができるから、容易に戦争に訴えることができるし、そして実際に戦闘に至ればめっぽう強い、という物語を展開したのである。

重要なことは、この優位性をさらに強調していけば、先に出されたデモクラシーの様々な欠点を強調する議論を逆転させ、デモクラシーこそが望ましい政体であるとの主張——主流の政治理論とは重点が違うものの結論的には同じ主張——を展開することができるし、実際、かような主張こそが環大西洋の近代共和主義の本来的な動機付けであった、ということである。16世紀、近代国家が台頭して互いにしのぎを削り出した不安定な国際関係にあって、マキャヴェリは戦争に強い強大な帝国をつくり出すことができる共和制こそが最も望ましい政体であると喝破したのであった。確かに、共和国では人民が力を持つため、そこには内在する不和・内紛ゆえの不安定性もあろう。しかし、不安定な国際関係にあっては、強力な国家をつくり出すことこそが各国の一義的な課題なのであり、国内矛盾による不安定性があってはじめて強大な帝国が可能なのだとすれば、そのような不安定性は致し方ない代償とも言えるものであり、容赦なく帝国建設を進めることこそが肝心と言えるのである³⁹。

それでは本当にデモクラシーはその不安定性のゆえに帝国を希求するよう運命付けられているのだろうか。藤原帰一はその著書『デモクラシーの帝国』において同様の問いかけを行い、アメリカのデモクラシーという理念が「国内では権力行使を制限しながら、対外的にはむしろ権力に加えられる拘束を解き放ってしまうという逆説」を生んでいる点を指摘しつつも、結論的には大国の帝国への転化は決して必然ではないと主張している⁴⁰。

ただ、現実を見れば、そのように楽観的な見通しを述べることは、勇気が必要なことのようにも思われる。ツキディデスはペリクレスをして言う⁴¹。

諸君は既に帝国を僭主制として握っているの

あって、それを獲得したことが不正だと思われるにしても、手離すのは危険なのである。そのような弱気の人々は、直ちにポリスを滅すことになるであろう。

アメリカ大陸に居を構えるデモクラシーの帝国はエーゲ海を越えて黒海にまで海軍を出し、さらには文明発祥の地に傀儡を置く。ただ、帝国の申し子であってその建設に手を汚したわけではないオバマはそのような率直さをもって語ることは今後もしないであろう⁴²。

注

- 1 Obama, Barack, "New Era of Responsibility," Inaugural Address, 20 January 2009, http://www.whitehouse.gov/the_press_office/President_Barack_Obamas_Inaugural_Address/ (Accessed 11 September 2009).
- 2 建国の父たちがアフリカ系市民の大統領にその子孫が仕えることまで想定していたのか、それは不明である。周知のように、合衆国憲法第1条は奴隷制度を前提としている。
- 3 Obama, *op. cit.*
- 4 公共性の思想の再興はハンナ・アーレント、ユルゲン・ハーバーマスに負うところが非常に大きい。最も重要な著作は次のものになる。Arendt, Hannah, *The Human Condition* (Chicago: The University of Chicago Press, 1958). ハンナ、アレント『人間の条件』筑摩書房、1994年。ハーバーマス『公共性の構造転換』未来社、1973年。Habermas, Jürgen, *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category of Bourgeois Society* (Cambridge: MIT Press, 1989).
- 5 安全保障のジレンマとは、国際関係において、国家は軍備を整えなければ安全保障を達成しえないが、かといって軍備増強をしたとしても他国の不安を高めてその軍備増強を招くため、結局は安全保障を達成しえない、かようなジレンマのことを指す。これは、ジョン・ハーツの次の著作によって定式化された。Herz, John H., *International Politics in the Atomic Age* (New York: Columbia University Press, 1959). なお、『戦史』自体はアメリカなどにおいて、国際政治を学習するうえでの必読書として位置づけられている。「論語読みの論語知らず」の如き状況を指摘した論文として次のものがある。Bagby, Laurie M. Johnson, "The Use and Abuse of Thucydides in International Relations," *International Organization*, Vol.48 (1994), pp.131-153.

- 6 通常、人間の前に世界は「酸素、鉄、カルシウム化合物」などとして現前するのではなく、「空気、鉄橋、ビル」などとして現前する。そして、人間はそのように現れた世界の在り方について言語を用いて互いにやりとりを行い、リアリティを構成する。現象を誰にでも理解可能な共通の言葉で記述するよう、これを一定の手続きに沿って分析的に考える——自然科学的に考える——のは、ある特定の場合においてのみである。フッサール、E.『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社、1974年参照。
- 7 財産権——世界を分割することで定義された領域——の価値はその権利をもつ者各自によって分権的にかつ一義的に評価されうるものであり、その全体の状況は方程式で繋いで記述することができる。こうして、私的領域については自然科学に類似した客観的な理解に至ることが可能となる。See, Arendt, *op. cit.*, pp.56-57. アーレント、前掲書、84-85頁。
- 8 リバタリアンの主張においては、世界は物理的な基礎を持った私的領域に分割できる、と考える傾向が強いが、こうした見方には問題も多い。財産権には物理的な基礎のないものも多い。また、物理的に見ても、世界のかなりの部分は公的領域であり、私的領域はこれに支えられている、という現実がある。
- 9 Arendt, *op. cit.*, p.57. アーレント、前掲書、85-86頁。
- 10 現存していない対象を知覚する能力である構想力は、できるだけ多様な観点を自らの視座に取り入れる「拡大された思考様式」となって判断力を基礎付ける。Arendt, Hannah, *Lectures on Kant's Political Philosophy* (Chicago: The University of Chicago Press, 1982). アーレント、ハンナ『カント政治哲学の講義』法政大学出版会、1987年。
- 11 Arendt, Hannah, *The Human Condition* (Chicago: The University of Chicago Press, 1958), pp.52. ハンナ、アーレント『人間の条件』筑摩書房、1994年、78-79頁。
- 12 Arendt, Hannah, *Crisis of the Republic* (New York: Harcourt Brace and Company, 1972), pp.137-141. アーレント、ハンナ『暴力について 共和国の危機』みすず書房、2000年、127-131頁。
- 13 伊藤貞夫『古典期アテネの政治と社会』東京大学出版会、1982年。
- 14 この勝利は、かのヘロドトス『歴史』において、自由な市民の擁するポリスが一人の王の支配するペルシア帝国に勝利したものと捉えられ、その後、そうした評価が西欧世界において定着することになっていった。
- 15 母都市とは植民都市建設の際の植民者の出身都市のことを言う。一般に母都市と植民都市との政治経済上の結びつきには強いものがあつた。ツキディデスの記述に従えば、エピダノモスの場合、植民者の多くはキュリュキラ出身であつたが、植民都市創設者そのものはコリント出身であつたとされる。ツキディデス『戦史』第一巻第二十四章。
- 16 ツキディデスはこのように戦争の原因をスパルタがアテナイの強大化へ恐怖心を抱いたことに求めた。ツキディデス『戦史』第一巻参照。ただ、こうした見解にはケーガンらによる異論も提示されている。Kagan, Donald, *The Outbreak of the Peloponnesian War* (Ithaca: Cornell University Press, 1969).
- 17 ツキディデス『戦史』第二巻第三十六—三十七章。ツキディデス『戦史』を訳出するにあたっては、筆者にはギリシア語の原典の読み込みが事実上不可能であるため、基本的には次の邦訳を踏襲した。トゥキディデス、藤縄謙三訳『歴史 1、2』京都大学学術出版会、2000-2003年。ただし、述語などについて文脈上の修正が必要と思われる場合、次の英訳を参考にしてこれに修正を施した。Thucydides; translated by Martin Hammond, *The History of the Peloponnesian War* (Oxford: Oxford University Press, 2009).
- 18 ツキディデス『戦史』第二巻第三十九—四十一章。
- 19 ソポクレス『アンティゴネ』には、都市国家テーバイの主権者として振る舞おうとする王ハイモンを諫めて、その息子クレイオンが「一人の人のものならば、それはポリスとは申せません。…お一人で砂漠の国でもお治めがいいでしょう。」と述べるくだりがある。
- 20 プラトン『ゴルギアス』、アリストテレス『政治学』参照。
- 21 Kagan, Donald, *Pericles of Athens and the Birth of Democracy* (New York: The Free Press, 1991), pp.91-116. デモクラシーの実行部隊とも言える五百人評議会議員には手当が支払われていたが、これは貢納によって可能となった。
- 22 ツキディデス『戦史』第二巻第八章。
- 23 アテナイにおいては、女性、奴隷、在留外国人に市民権が与えられていなかった。開戦当時、総人口に占める市民の割合は六分の一程度であつたと考えられる。伊藤、前掲書。
- 24 Kagan, *op. cit.*, pp.228-245.
- 25 ツキディデス『戦史』第二巻第六十一—六十一章。なお、この言説は安全保障のジレンマに言及しているが、ジレンマを描いたものとしてより頻りに引かれるのは、アテナイが開戦を決断したときのペリクレスの演説である。ツキディデス『戦史』第一巻第四百四十一—四百四十四章。
- 26 ツキディデス、第二巻第六十三—六十四章。
- 27 ツキディデスは『戦史』全般を通じて事実を語るこ

- とによって彼の政治的立場を示している。ロミイ、ジャクリーヌ・ド『ギリシア文学概説』法政大学出版会、1998年、194頁。そもそも、『戦史』にはこれに限らず様々な演説が再現されているが、どうしてそのように詳細な再現ができたのか、ツキディデス自身の見聞によるところが大きいと考えられるが、不明なところがある。当然、ツキディデスの創作が入っているとの解釈もある。
- 28 アテナイのデモクラシーは、実際には、アテナイはペリクレスの支配下にあったこと。また、その統治がうまくいった本当の理由は、ペリクレスが私事ではなく公事に身を捧げていたためであったこと。それゆえ、ペリクレスが死去するとそのデモクラシーは機能しなくなってシシリア遠征などの失政が続き、アテナイが最終的には没落したこと。以上のコメントをペリクレス死去の直後の部分——20余年に亘る戦争を記した戦史の端緒の部分——にツキディデスは記している。ツキディデス『戦史』第二巻第六十五章。なお、ツキディデスの記述自体はアテナイの最終的な敗北を前にして終わっている。
- 29 プラトンは大のデモクラシー嫌いであった。『国家』では哲学者による統治を、『法律』ではスパルタの統治形態を参考にした統治形態を理想の政体として示した。20世紀の哲学者カール・ポパーはこれをプラトンによる師ソクラテスへの裏切りとしたが、ソクラテス自身がデモクラシーの支持者であったという確証はないように思われる。Popper, Karl Raimund, *The Open Society and its Enemies* (New York: Harper & Row, 1966). ポパー、カール『開かれた社会とその敵』未来社、1980年。
- 30 アリストテレスは『政治学』において政治に基づく統治の体系的理解を提示した。その論理は「多数者の英知」とも言うべきものであった。そこには次のような言説がある。「もし法が全的にか、適切に裁定できないことがあるならば、支配すべきは一人の最善なる者だろうか、それとも市民全体だろうか。…ちょうどみんなが持ち寄った会食が、一人の出費でまかなわれたものより、もっと豪勢であるように。まさしくこのゆえに、だれであれ一人の人よりも、群衆のほうが多くの事柄をいっそうよく判定するのである。」アリストテレス『政治学』第三巻第十五章。Waldron, Jeremy, *The Dignity of Legislation* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999). ウォルドロン『立法の復権 議会主義の政治哲学』岩波書店、2003年参照。ただ、よく知られるように、13世紀以降、アリストテレスの政治思想はトマス＝アキナスらによって西欧社会に受容されはしたものの、それは基本的には「多数者の英知」の思想の受容というよりも「法の支配」の思想の受容であったと言える。アリストテレスは「多数者の英知」の議論を展開したが、その前提として人間による恣意的支配を超えた「法の支配」が望ましいとしていた。中世においては、人間はその理性によって神の摂理を自然法として認識することができると考えられており、アリストテレスの思想はかような自然法による支配こそが望ましいと読み替えられることで受容されたのである。
- 31 社会契約論の発想は私的領域の保護について指針を示したものの、公的領域の統治のあり方について明快な理論構成を示したものとは言えなかった。私的領域が単一の視座からリアリティが構成されるのに対し、公的領域は複数の視座からリアリティが構成される。それゆえ、公的利益は私的利益と言わば次元を異にして存在するものであって、それを積み上げた上で計算して構成される類のものではないはずである。ところが、社会契約論においては基本的には個人がそれぞれの利益を守るために社会契約を結んで国家権力を創出するとの発想が採られており、そのこと自体は公的利益を私的利益から独立したものと捉える発想にはあまり馴染まないのである。この点、『統治二論』において、ロックもまた何が自然法であるかについて人々に意見の対立があることを認めており、主知主義的に「政治の状況」を認め、これをもって多数決の原則を是とする政体をよしとした、とする解釈がある。Waldron, *op. cit.* ウォルドロン、前掲書。ただ、ロックにおける公共の利益の概念は共和主義の唱えるものとは随分と違うものと言える。『統治二論』では公共善 public good という語が用いられている個所があるが、全体のなかでのどのような意味となるのか不明瞭である。ロック『統治二論』第二巻 para 156, 158, 160, 164-166, 239. また、別の個所で共通善 common good という語が用いられているが、これは文脈から私的利権を積み上げて構成されたものと解することができる。同書同巻 para 131. ルソーの革新的であったところは、彼がマキャヴェリを見習い、社会契約論に公的利益の考えを導入してその再構成を図ろうとしたところにある。全体意思を超えた一般意思があることを明らかにして——ある意味で社会契約論を無効化して——、人民は十分な情報を持って審議すれば一般意思に必ず至るとしたのである。ルソー『社会契約論』第二編第三章。
- 32 当時はマスメディアも存在しなかった。新興王権の統治する広大な領域において、共通の間で結びつき、意見を出し合い、和解を形成することなど不可能と考えられた。
- 33 マキャヴェリ『リウウィウス論考』第二巻第二章。マキャヴェリ『リウウィウス論考』を訳出するにあたっては、筆者にはイタリア語の原典の読み込みが事実上不可能であるため、基本的には次の邦訳を踏襲し

- た。マキャヴェリ、永井三明訳「政略論」会田雄次編『マキャヴェリ 世界の名著第十六巻』中央公論社、1966年。ただし、述語などについて文脈上の修正が必要と思われる場合、次の英訳を参考にしてこれに修正を施した。Niccolò Machiavelli; translated Julia Conaway Bondanella and Peter Bondanella, *Discourses on Livy* (Oxford: Oxford University Press, 2003). なお、マキャヴェリがよしとした共和制は純粋なデモクラシーではなく、一国内に民主制、貴族制、君主制が共存し、互に行き過ぎをチェックする国制であったが、かような思想は権力分立の思想へと継がれることになった。
- 34 マキャヴェリ『リウィウス論考』第一巻第六章。マキャヴェリは、国内の安寧を求めたスパルタなどの国家の在り方も学ぶところは多いが、国内の騒乱を顧みずに市民を武装させ、さらに外国人の流入を許容して共和国の拡大をめざしたローマこそが最も望ましい国家である、とした。
- 35 マキャヴェリは政治を道徳——あるいはその背後にある自然法——から切り離し、代償という考えを用いることで共和制を最善の政体とした。彼は『君主論』などにおいて「善が悪をなし、悪が善をなす」といった趣旨のパラドックスを展開し、政治から道徳を切り離した功績をもって近代政治学の開祖とされるが、かような論理の真骨頂は彼の共和主義の擁護にこそ見られる。
- 36 マキャヴェリの思想はイングランドに古代ローマ再興の如き構想を唱えたハリントンらによって受け継がれ、そこで主張された国家権力の分立・均衡を必須とする思想——研究者たちがカントリー・イデオロギーと呼ぶ思想——は環大西洋世界で猛威をふるった。Pocock, J. G. A., *Virtue, Commerce, and History: Essays on Political Thought and History, Chiefly in the Eighteenth Century* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985). ポーコック、J.G.A.『徳・商業・歴史』みすず書房、1993年。Pocock, J. G. A., *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition* (Princeton: Princeton University Press, 1975). ポーコック、J.G.A.『マキャヴェリアン・モーメント フィレンツェの政治思想と大西洋圏の共和主義の伝統』名古屋大学出版会、2008年。
- 37 実のところ、アレントもまたツキディデスを同様に解していたように思われる。Arendt, Hannah, *The Human Condition* (Chicago: The University of Chicago Press, 1958), pp.205-206. ハンナ、アレント『人間の条件』筑摩書房、1994年、330頁。ただ、これをアレントの真意とみるならば、現代政治理論には変革が必要である。
- 38 国際関係論においては、このカントの平和主義思想が脈々と受け継がれて来たが、とりわけ1990年代以降、「民主制の平和」と称する議論として見直されるようになった。こともあろうに、ラセット一派がカントの命題を統計学的に「実証」しようとしたのである。ラセットの議論、その後の論争については以下を参照。Bruce Russett, *Grasping the Democratic Peace: Principles for a Post-Cold War World* (Princeton: Princeton University Press, 1993). Michael E. Brown, Sean M. Lynn-Jones and Steven E. Miller (eds.), *Debating the Democratic Peace* (Cambridge: MIT Press, 1996).
- 39 このような議論に前出のカントの議論を重ねれば、次のような議論に発展するかもしれない。諸国が共和制を採ることで世界平和が訪れるのであれば、かような強力な軍事力を持つ共和国が専制国家に率先して戦争を仕掛け、これを共和制へと体制転換させること、そうしたことこそが世界平和のために最も望ましいということになるのである、と。実際、こうした発想はイラク戦争にあたってのブッシュ・ドクトリンへと繋がっていった。民主党リベラル派に起源を持つとされる新保守主義の影響の下、イラクの体制転換——さらにその帰結として期待された中東の平和——をめざした戦争が実行に移された。
- 40 藤原帰一『デモクラシーの帝国 アメリカ・戦争・現代世界』岩波書店、2002年、52-53頁、195頁。
- 41 ツキディデス『戦史』第二巻第六十三章。
- 42 1961年、オバマは留学生として招かれた——帝国のイデオロギーを広めるために招かれた——ケニア人の父と大陸からハワイへ移り住んでいた白人の母とのあいだに生まれた。出生地のハワイはその前々年に合衆国属領から加盟州に昇格したばかりであった。その後、オバマは合衆国の非公式帝国領とも言えるインドネシア・ジャカルタにて幼年時代を過ごし、さらに、ハワイに戻って大学に進学するまでをそこで過ごした。オバマは歴代大統領の誰よりも世界に広がるアメリカ帝国の偉大さを実感して育った。